

彼の携帯

黒野 ている

好きで見たわけじゃない

バッテリー切れで でも画像送りたいから
無理にケータイ借りちゃった

操作がわかんなかったから
いじってた
『来週の土曜日 楽しみです』
って短いメールが開いちゃった

ふ〜ん 来週の土曜日だって〜

え

その日って
あたしと映画行くって言ってたじゃん

そのあと
ステキなお店に連れてってあげるって
言ってたじゃん

え
どういうこと？

あたし

キャンセル・・・される？

扉が開いて

外からの冷たい風が身体を包む

「ああー!! ごめん、遅くなって。画像送れた？」

数分間・・・心臓止まった・・・

「あっ！ いやいや・・・だいじょぶ、送っといたよ、たぶん」

「たぶんって、送れたんだろ？見せて」

「いやいやいや、大丈夫だから！」

あたしは彼のケータイを閉じた

「はい・・・ありがと」

手渡すときに

なんとなく 手が震える

さあ これからどうする？って彼が聞く

・・・けど

なんか なにも かんがえられないよ

「今度さ」

来た・・・？

「こんど・・・なに・・・？」

ああ もう顔が見られない・・・

「となりに出来た店がペットショップでさ。メチャメチャ可愛い もう」

おいおい メールはその女子か？

「柴犬だけど 柴でもカワイイのとカワイクナイのがいるんだよな」

いるだろうよ

いや

そうじゃなくて

「オスでさ キリッとしてて」

オス・・・じゃなくて

「飼えるもんなら 飼いたいなあ・・・おまえのトコ、ペット禁止？」
どこのワンルームマンションで柴犬飼えるんだ

「あのさ」

「えっ？飼えるの？」

ああ もうペットショップのことしか頭にないんだ
きっとおねーちゃんに柴犬売りつけられるんだ

「そうじゃなくてさ、あの」

「？」

「ら、来週のはなし」

もう そこから言葉が固まってでてこない

しばらく 間があって

「・・・あー」

なに この 間

「あの・・・さ」

やだな もしかして地雷ふんだ？

「それ もしかしたら」

馬鹿だな あたし

「変更 するかも」

何を期待してんだろ・・・

「・・・えっ・・・」

かたちだけ おどろいておく だって みたって いえない

「また 連絡いれるわ」

ことわりの れんらくを 待てばいいですか・・・？

無言・・・

ばかだな あたし・・・

見るんじゃ なかった・・・

次の日 彼からメールが来た

「おはよう

熱下がったの？

あまり無理するなよ」

熱 なんか ないよ

体温もテンションも下がりっぱなしだよ

きのう 熱のせいにしてあのまま帰ってきちゃった

一緒にいられなかった

なにか口走りそうで、あれ以上いられなかった

お願いだから 間違いだって

関係ないって言って

ショックで 涙もでない

お昼休みに 返信をいれる

「ありがとう 心配かけてごめんね

久しぶりに熱を出したから

おとなしくしてます

来週 』

そのあと　なんて書けばいいの

『までに　直るかな？』
よし、熱のせいにしちゃえ

あ、熱だしてる場合か？
熱・・・そんな場合じゃない

でも
でも
最後の一行　消して

『来週までには直すからね』
で　やっと送信した

深いためいき
どーしよ・・・

その日　彼から連絡は来なかった

で　夕方

よせばいいのに、そのペットショップ見に行っちゃった

真新しい木の香りのする明るい店内
可愛い子犬や子猫が
そして　可愛い店主が・・・いた

いやだ　ポメラニアンみたいに可愛い・・・

可愛い声で いらっしゃいませと
あたしに微笑む・・・

来るんじゃなかった
見ちゃいけないかった
ペットショップで負け犬になるなんざ
シャレにもなんないわ

「あたし・・・」
「はい。なにかお探しですか？」

・・・あっ あたしって 今声に出したっけ？

「あ、あの し 柴って」
「ああ 柴犬、いるにはいるんですが」
店主は後をふりむいて
「ちょっと 気に入られたお客様がいて・・・商談中なんですよ」

え

「ごらんになられます～？すごくいいコなんです」

裏から連れられてきた子犬は・・・

う わ っ ！

か っ わ い い ～

黒がかった毛並み
くりっと濡れた瞳
キュッとしまった顔立ち・・・

「わ・・・これ・・・？」

「でしょう？みなさん 声でないんですよね～。
親も悪くないけど、たくさんいる兄弟のなかで、このコ ダントツなんですよ～」

もう アイツなんか いらん
どこでもいっちゃえ
このポメラニアンにくれてやる

それよりも このコがほしい・・・

「いくら・・・するんですか」
「ちょっとお値段はするんですが・・・
でも なにぶんにも商談中で、連絡いただくことになってるんですよ」

高いんだろなあ
ダメかあ

あれ？飼うなんて気、ないのに
てか 飼えないのに
なんか惚れたか このコに？

「あのっ もしキャンセルでたら・・・ご連絡いただけますか？」

なんか とんでもないこと言っちゃったぞ
おいおい

「キャンセルですか・・・たぶん ないとは思いますがよ～？
いいですか？ あまりガッカリされるのも申し訳ないですし」

「いいんです」
あたしはキリッと言いきった

よくないだろ 何この展開？
テーマから大きく外れてきたよ？

「おねがいします!!」

ポメラニアンに連絡先を渡して 店を出た

隣は彼の会社だ

だけど 今日には寄らないよ

スルーして 駅まで歩く

連絡・・・きたらどうしよう
あれ？今さら何言ってんだろ

ヤケ買い？
いや そんな不純なものじゃない
しかもよりによって
ポメラニアンから買うってどうよ

・・・いえ そんな下種なことじゃない

あのコ 彼がほしがるわけだ
昔見せてもらった飼い犬に 似てるんだ

あの柴犬の愛らしい顔がポヤポヤと胸に広がり
うっかり忘れていたが
彼からの連絡は まだない

いいんだ
どうせ言い出しにくくて
ドタキャンくらうに決まってるもん

こっちから絶対に連絡いれないっ！

・・・それにしても
ポメラニアン可愛かったな
彼を盗られちゃうのかな
このまま・・・？
あたし なんか悪いコトしたかな？

いくら可愛いからって
そんなカンタンに変われるものなの？
それで

それで

柴犬も 先の人が契約しちゃったら・・・

どーなる？

あれっ？
あたし 何も残らないじゃん

ひとりきり・・・になるの？

彼はポメラニアンとデートでえ。

柴犬は 新しい飼い主のところへ行ってえ。

あたしは 一人でえ・・・

「なんでえ？」

目の前がかすんで見えない・・・

いやだ まだ 工作中・・・

床にわざとペンを落としてしゃがみこむ

しばらく 立ち上がれない

なにやってんだろ あたし・・・

真っ赤にはれた目をコンタクトのせいにした帰り道

着信が・・・

彼だ

「・・・はい」

『なんか声変だな。』

「え 別に。」

『風邪、まだ治らないの？』

「あ ああ そうなの、声がね～」

そうか 熱出したことにしたんだ。

それで連絡なかったのかも。

『そうか・・・じゃあ 今度は休んだほうがいいな』

「え？あ？・・・だ、だーいじょうぶ・・・」

『無理することないよ。やっぱり休んだほうがいいよ』

「大丈夫だって！声だけなの。もういいの」

『ダメだよ。寝てないと。今夜も寒くなるらしいし。』

なんか くやしい・・・

「ねえ いまどこにいるの？」

『あー 今 会社でたところ』

ケータイの向こうで 犬の鳴き声が聞こえた・・・

そこ で

あたし

ケータイ

落としちゃった・・・

携帯は

あたしの手から落ちて・・・

人ごみの中 歩道をすべり 車道に落ち

はかなく 消えた

そこで どれだけ立ち尽くして

どうやって歩いたんだろう

あたしは

気がついたら

あのペットショップの 前にいた

店内に人影が動く

見ちゃいけないけど もうダメなの・・・

はっきりしないと 帰れない

木の扉の小さな窓から 中を覗いた。

ああ 目の前が 見えなくなっていく

扉の中にいるのは 見慣れた 彼だ

やっぱり そうなんだ

ぼんやり見ていると 彼が近づいてくる。

あわてて物陰に隠れた。

扉が開くと

彼と その後にポメラニアンが出てきた。

「すっごく楽しみだわあ！」

「楽しみにしてくれるの？あはは・・・じゃあ 土曜日に！」

「そうね 土曜日にね」

そこでポメラニアンは 彼の頬にキスした。

待ってるわって そう言った

もう どうするよ コレ・・・

もう あまりのことに立ってられなくて、しゃがみこんで泣いた

心臓が口から飛び出るくらい苦しくて 苦しくて

このまま 心臓マヒか呼吸困難でどうにかなってしまえばいい

今夜のあたしは 人類の歴史に残るだろう

それから 彼に連絡できるすべもなく・・・

ある夜 仕事帰りに携帯ショップに寄る

華やかな色合いをみても ちっともキレイじゃないよ

訳を話したが 新規のほうがいいと言われ、

「番号は変わりますが・・・それとアドレスも引継ぎはできません。

まっさらの状態でのお渡しになりますか よろしいですか？」

普段なら さわやかな笑顔のおにいさんに

ポツとなるところだけど 今日はそうもいかない

「はい」

では お手続きを、と書類を渡される

「ここにお名前と・・・」

言われるままに 名字と、名前と

「・・・あの」

「えっ？書くところ違います？」

「いえ」

目が合う

「あの 先輩ですか？」

「はい？」

目が合う

誰？

「高校の時、バスケ部でしたよね？」

「そうだけど」

「1コ下の 健斗です！覚えてないですかあ？

ほら 高橋先輩とか、川本先輩とか・・・つるんでたじゃないですか！」

ああ 覚えてるけど・・・健斗？だれだっけ？

「あと 坂田先輩と」

その名前 今出すな・・・

「あれ？どうしたんですか？先輩？」

もう仕事も終わるからと 健斗は近くのカフェを教えてくれた

オーダーするのも 恥ずかしいくらいボロボロだ
たまにはこういうお客さんもくるんだろうなと思えるくらい
店のスタッフはクールだ
今のあたしには ありがたい

しばらくして健斗が来た

「手続きは完了したんで もう使えますよ。充電もしたんで」
「ありがとう」

前とは違う メーカーも色も番号もアドレスも・・・
もうここに 彼からかかってくることは ないんだ

「ありがとう・・・」
また泣けてくる

「なんか あったんですか？・・・って聞いちゃいけないか」

「偶然なんだけどね・・・見ちゃったのよ」

あたしはなりゆきを話した。

「・・・で、携帯もこわれちゃったんで、連絡のしようもないし。彼からも連絡は来ない」
ふっと 笑った あたし

「見ちゃダメですよ～。まぼろしがホントになっちゃうんですよ、そういうのって」
健斗も笑っている

「話の流れでは」

悩み事のなさそうな顔だ

「先輩 携帯へし折らなかったみたいですね」

「そんな余裕なかったなあ・・・こわれたのは あたしのほう」

笑っている

「よく あるんです。で 直してくれって。直りませんよ、携帯も二人の仲も」

直らない・・・二人・・・

「あー すみません」

握り締めた新しい携帯に 涙が

これ防水だっけ

とまらない・・・

と

初めて聞く着信音

これ？

これが鳴ってるの？

だれも知らないはずの番号なのに？

「出てくださいよ」

「でも」

「初めての着信、俺でもいいでしょ？」

あ 番号知ってるんだ そういえば
あたしは通話を押す

『ホントはこういうのいけないんだけど』

「だよね」

『でも また話してください いつでも』

近くて 遠い声だ

この声・・・

「あの、あなたさ・・・高校のとき」

思い出した！

「あたしに電話してきたよね？」

あの声だ

『・・・しましたよ 思い出しました？』

目の前でニヤッと笑う

夜遅い電話で やっぱり知らない番号で
好きだから つきあってくれって唐突に言われて
誰？って聞いたら 電話切れちゃった

それっきり わからないまま

「なんで名前言わなかったのよ。あれ高2？高3？」

『受験生の先輩に そんなこと言えません』

高3・・・そんな時期かあ

『でも あのときじゃ名前聞いたってダメだったでしょ？』

もうあの頃 彼のことを好きになりはじめていたからなあ

「・・・そう、ねえ」

健斗は通話を切った

「俺 先輩好きですよ。今でも」
帰り際、健斗が軽く言う

「ありがと」

「本気にしてないでしょ」

「うん」

健斗が笑う

「あいかわらず ハッキリしてるなあ」

あたしもつられて笑う

明日も また会えるかと 健斗が言う

「電話するわ、さっきの番号に」

「了解」

まっさらのアドレス帳に 健斗の名前を

「ごめん 名字 なんだっけ・・・？」

数日たって あたしあてに会社に電話があった

『坂田と申しますが、お世話になります』

「・・・はあ」

『はあって どうしたの？なにそのリアクション？ケータイ通じないし、どうした？』

「申しわけありません、ケータイが故障してしまいました」

『なんかおかしくない？』

「こちらからかけ直しますので お電話番号うかがってもよろしいでしょうか？」

あらためて 彼の番号を聞く

となりの席の口に クレームかと聞かれる

ただの 問い合わせ、と答える

仕事が終わってから 彼に電話を・・・

新しいケータイから かけたくなかった

番号を知られたくなかった

でも 話さないわけにもいかない

でも 話すわけにもいかない・・・

あたしは何も話さないまま 彼は部屋まで送ってくれた。

「なんで 話さないのかわかんないけど」

後手でドアを閉める。

「このままじゃ 帰れない」

「この頃 おかしいだろ？」

おかしいのは あたしじゃないのに

おかしいのは・・・

「なにか あったの？」

もう・・・めんどくさいよ 話すことすら

「・・・疲れたから・・・」

やっと あたしは口を開いた

「眠らせて」

でも

暗闇のなかで あたしは眠れないままで

あたしの壊れたケータイの中には、まだ編集してない写真がたくさんあった。

それは一緒に行った街だったり、山だったり、海だったり・・・

つまらない写真も多いけど、お気に入りもたくさんあった

夜の闇のなかに 全部 消えちゃった

寝息が聞こえる・・・

眠ってしまった彼に毛布をかける。

寝顔 子どもみたいだな...

どうして こうなっちゃったんだろう？

ごめんね 疲れてるのに。

ポケットに ケータイが見える

つい 気になって

また 彼のケータイを ひらく

心は 魔女だ

あの日の メール
『土曜日 楽しみです』

もう一度 読む

誰から・・・？

『ゆうき』

ポメラニアンなのかな？
そういえば あの時 頬にキス・・・

言いようのない 不安と嫌悪

メールをさかのぼる

いくつか短いやりとり
でも ハートがとびかう
「やっぱり ゆるせない・・・」

『さっきはご来店ありがとうございました□
きっときっと思い込んでいただけだと思いますよ。
彼女サンのお名前は？
首輪と一緒にお入れすることもできますよ』

彼女って・・・知ってるんだ

あたしのこと

それなのに

さっきかけたあたしの履歴を 彼のケータイから消した
さようなら

「なに見てるの」

はっ と凍りつく空気

「あ、おこしちゃった・・・？」

「眠れないって」

「ごめん・・・」

「なんでケータイ見てたの？」

「このまえ 見ちゃったの・・・メール」

「はあ？」

「画像送ったとき、なんだかメールあいちゃって」

「なんだった・・・？」

「土曜日って、なに？」

しばらく 間があいた

「それと この前、ペットショップで」

「いたのー!？」 そう いたの

「見たの・・・？」 そう 見たの

「ああ」 そうなの

「それで」 そうなの

「でもさ」 …… そうだよ

「ごめん、あたしは もうイヤだ。見たのは あたしが悪いよ。でも イヤだ」

もう泣けないのはなんでだろう？ここでかわいく泣くもんなんじゃないか？

「だから・・・これで 終わろう」

あたしの言葉に 彼は無言だった

夕方 健斗からメールが入る

『今日は早上がりだから 飲みに行きませんか』

ひとりでいるといろいろ考えそうで

「いいよ 6時半に来てくれる？」

と 返す

だれにも教えていないアドレスは、健斗とのやりとりにしか使っていない

今 これを彼に見られたら・・・？

いえ 彼とは おわってる

健斗に 言うべきか

それとも・・・

向こうで健斗が手をあげる

「おはよ。なんか眠たそうな顔してる」

「きのう・・・眠れなかった」

「なんかあったの？」

なんで 彼の前では泣けなかったのに

健斗の前では

こんなにカンタンに 泣けてしまうんだろ？

「それは 先輩が悪いでしょ？」

気を利かせて 個室をとってくれた健斗は渋い表情だった

「悪いって知ってるから 泣けるんですよ。しまった！って後悔してるんですよ」と まくしたてで ため息をつく

「ケータイ見たって 日記見たって、見たこと気づかれちゃダメだし言っちゃダメだよ。そういう人いっぱいいたけどさ。見なきゃよかった、ってみんな言うよ」

すべて 正論だ

「見なかったことにすれば いいことなのに」

そうだ 子どもじゃあるまいし

「先輩だって 言えないことなんていっぱいあるでしょ。言うまでもないこととかあ、言うべきでないこととかあ、言わなきゃよかったこととか！」

健斗が にらんでる

「言ってよかったと思う？この現状。これでよかった？こうなりたかった？」

そんなこと ない

「流されてるだけじゃダメだよ。だってさ 今でも すきでしょう？嫌いになんか なってないでしょう？思い通りにならないことがたったひとつ あっただけなんじゃないの？」

・・・はい

「言い方 悪いけどさ、 俺なら・・・ ゆるさない」

え

「そういうのって 我慢できないよ。たとえ偶然でもね。どんな状況で、どんなに好きな相手でもね。

俺なら そこで 終～了～」

こわいよ 健斗

「なにも言わなかったって、坂田先輩すげえって思ったもん」

そうなんだ

すげえんだ

あたしの彼は

「気持ちがあるんなら あやまっておいでよ。

それから 決めなよ。先輩から 『終わる』って決めることじゃないよ」

俺 また同じだよ あの時と・・・と 健斗がつぶやいた

あたしは また 人の心を傷つけて

この世に生きてる

「ごめんなさい」

「ああ そんなことじゃないから。俺にあやまらなくてもいいですよ」

「じゃあ」

「じゃあ、なんですか？」

「ありがとう。いろいろ」

健斗は笑っていた

「俺 先輩のこと 好きですから」

「それも ありがとう」

「また本気にしてないや」

「ううん、でも うれしい」

店を出ると 健斗はケータイを取り出した

「もう 先輩には俺からはかけませんから。履歴全部消しといてくださいよ。俺 巻き込まれたくない」

笑いながらそうって あたしの番号を 消した

「まあ 何かあって先輩がかけてくるのはいいけど・・・そんなこと ないでしょ 絶対」

それは あたしにはわからない

でも なぜ彼は あたしに何も言い返さないんだろう？

「先輩を傷つけた、って 自分を責めてるんじゃないですか。何も言わないのは やましいところがないからだ」と

俺は そう思います、と健斗は手を揚げて 闇に消えた

雑踏のなかで ひとりになって

思うことは

あたしは 部屋に入る前に彼に電話した
健斗にいわれたことを忘れないうちにあやまろうと

呼び出し音に混じって着信音が聞こえる

混信 . . . ?

近い

すぐ 目の前に

あなたが いた

= fin =